
LOVERS T&S

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVERS T&am p ; S

【Nコード】

N9500M

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

先生&生徒モノの短編集。

あわゝい青春ものです。

現在のCP数

NL:1

時枝先生の場合（前書き）

時枝先生の場合

時枝先生の場合

夜9時に寝る。

朝5時に起きる。

起きたら先ずは顔を洗い、用を足し、歯を研ぐ。

コップ1杯のミネラルウォーターを飲み干し、ジャージに着替えて10キロのランキングに出る。

帰ってきたら、軽くシャワーを浴び、スーツに着替える。

エプロンをし、朝食を作るとよく咀嚼し、身体にエネルギーを充電。

7時半に家を出る。

「先生、おはようございます。」

「おはよう。」

校門で会う生徒に挨拶され、教員用の玄関から入る。

「時枝先生、おはようございます。」

「東雲先生、おはようございます。今日は早いですね。」

懐っこい笑みを浮かべる同僚にも挨拶。

いつも遅刻間際に来る同僚が今日は早い。

「雛が出張で居なくて…」

奥方馬鹿な同僚の妻は出張で留守らしい。

「時枝先生…さみしい。」

「僕は付き合いませんよ。牧田先生あたりを誘ってみては？」

前に東雲先生に付き合ったら、睡眠の邪魔をされた。

9時に寝て、5時に起きる。

時間を狂わすのは嫌いだ。

自分ではなく、独身者で、しかも気軽に飲食に付き合ってくれる体育教員の名前を出して、拒否をする。

「たまには時枝先生、飲みましょうよ。」

「東雲先生は寝かしてくれませんかから嫌ですよ。」

「…時枝先生…東雲先生は既婚者です。」

すがり付く同僚を引き剥がそうとしていると、知らない横槍が入る。自分と東雲先生の間小さな黒い頭が見えた。

その頭の主は真っ赤な顔をして、頭を横に振っている。

「瑞城先生…気色悪い誤解はやめて下さい。そして、東雲先生、気持ち悪いんで拳を口元に当ててクネクネしないでください。」

朝からタイムロスだ。

職員室に入る時間を5分もロスしてしまった。

引き止めたのが、勉強の質問にきた生徒ならば喜ばしいのだ。

8時半。

「おはよう。」

生徒に挨拶して始まるSHRはショートホームルームきっちり10分で終わらせる。

「時枝先生、東雲先生が呼んでますよ。」

廊下の扉に近い生徒に呼ばれて、行けば東雲先生がニヤニヤしていた。

「…何か？」

「教頭先生から時枝先生に」

語尾にハートを着けて話す同僚を無視し、受け取った書類を確認する。

「…東雲先生、授業が始まりますよ。」

何故かワクワクと人の顔を見ている同僚を自分が出てきたばかりの教室へと突っ込む。

「春ちゃん、忍君に怒られるから、授業始めなよ。」

誰が忍君だ。生徒達には帰りにでも注意しておこう。

今日は朝から調子が鈍る日だ。

注意せねば…

「や…いや…」

調子を崩された今日はいつもより遅い帰宅になってしまった。
混む電車の中で、真つ赤な顔をした女性が小さな声をあげている。
この沿線は何故か痴漢が多い。
女性と目があってしまった。

「…」

どうやら生徒の様だ。

確か3年6組の夏井樹里だったか…生徒をこのまま放置するわけにはいかないな。

「すみませんが、我が校の生徒に何をしていますか？」

スカートの中に潜り込んでいる手を掴んで引き抜く。一瞬、艶めかしい女の匂いがした気がしたが、どうでもいい。目の前の冤罪を叫ぶ男を睨み付ける。

「私が彼女のスカートから引き抜いた手は間違いなくこの手ですよ。駅を降りたら、交番に行きましょうか。」

生徒の少女を背後に隠し、青ざめた男に冷笑して、直ぐに着いた駅

で降りた。

「時枝先生…好きです。」

先月、痴漢から助けた生徒に告白されている。

「すみませんが、教師の立場上、それについて、頷けません。」

あれから沿線で目が合う度、学校で目が合う度、彼女の好意を感じる度に、自分も目が離せなくなっていた。

しかし、教師の立場上、彼女と付き合うことはできない。

ましてや、彼女は受験生だ。モチベーションを下げることもできない。

「はい。……………ありがとうございました。」

そう言つて、泣きながら教室を去ろうとする彼女を引き止めた。

「今は返事出来ませんので、来年の4月、私のことがまだ好きだったら会いに来て下さい。その時は1人の男として私から告白します。県内の国立…受験勉強、頑張ってくださいね。樹里さん。」

これでは好きだと語っているようなものだが、あくまでも彼女がその時まで自分を思っていてくれるなら告白しようと言うのは、自分でもへたれで卑怯だと思う。

「は…はい！頑張ります。」

思いは通じたようだ。

涙を流した顔は既に笑顔になっている。

「お待ちしますからね。」

笑顔で手を振ってやれば、彼女は顔を赤らめて手を振り返してくれた。

「忍君、おかえりなさい。」

朝のジョギングから帰ると最愛の妻が迎えてくれる。

あの頃から変わらない笑顔に癒され、珍しいことをしてしまった。頬にキスされた彼女は顔を赤くして照れている。

「好きですよ。樹里さん。」

時枝先生の場合（後書き）

ときえだしのぶ
* 時枝忍

* 28歳

* 几帳面な性格

* 顔はそれなりに整っていて、眼鏡がストイックさを出していて素敵と人気。

* 同僚の東雲先生のツッコミ役として不本意な認識をされている。本人は東雲先生にいじられている自覚なし。

夏井樹里

18歳

泣き黒子あり。乳が大きめなので、よく痴漢に合う。
成績は比較的良い。

大学卒業直後、時枝と結婚。
素直で頭が良い子です。

夏井樹里の場合（前書き）

時枝先生のお相手、樹里ちゃん視点

夏井樹里の場合

また痴漢だ…

さいてー

さいてー

さいてー

いやらしい手がスカートの中に手を入れてきた…信じられない。

さいてー

学校の図書館の閉館時間ギリギリまで勉強してから帰ってきた。おかげで帰宅ラッシュに巻き込まれて、この有様…

さいてー

変態！

泣きそう…

泣きそうだ…

周りを見ても、これじゃ、助けてもらえない…

その時だった。

…あれは時枝先生？

友達がストイックそうな所が素敵だと言っていた。

助けて…助けて…

痴漢に合っているのが恥ずかしくって、声が出せない。
目で訴えるしかなかった…

「すみませんが、我が校の生徒に何をしていますか？」

スカートの中に潜り込んでいる手が掴んで引き抜かれた。一瞬、指先が光っているように見えて居たたまれない。目の前の冤罪を叫ぶ男を時枝先生の背中越しに睨み付ける。

「私が彼女のスカートから引き抜いた手は間違いなくこの手ですよ。駅を降りたら、交番に行きましょうか。」

そうだ！

そうだ！

青ざめた男に冷笑する先生にぞくりとして…
でも、その背中はとても頼もしかった。

あ…今日は疲れてるんだなあ…
また東雲先生に絡まれてる…

今日も東雲先生に絡まれてる。

東雲先生って、本当に時枝先生が好きなんだなあ。

時枝先生って、機械みたいなイメージがあっただけど、勉強を教えてもらいに来た生徒が解き方を理解した瞬間に一瞬、嬉しそうに微笑むの。

いつの間にか、こうして時枝先生を見ていた。

機微な変化に気が付けば、気が付くほど…

気が付いたら、好きになっていた。

「時枝先生…好きです。」

告白をした。

好きだと自覚して、他にも時枝先生を好きな子がいるのも知って
て…

受験生なのに勉強が手につかない。

そんなの私らしくない。

うじうじするなら、振られて泣いて終わらせた方がマシ。

でも…出来ることならYESの返事をください。

「すみませんが、教師の立場上、それについて、頷けません。」

やっぱり振られた。

そうだよね。

時枝先生だもん。

生徒となんて、あり得ないよね。

「はい。……………ありがとうございました。」

先生に涙は見せたくない。

返事をありがとう。

ちゃんと振ってくれて、ありがとう。

勉強に集中するから、ちゃんと受験生に戻るから、今日だけは泣いてもいいですか？

教室から出たい一心で、ドアに手をかけた。

「今は返事出来ませんので、来年の4月、私のことがまだ好きだったら会いに来て下さい。その時は1人の男として私から告白します。県内の国立…受験勉強、頑張ってくださいね。樹里さん。」

頭が働かない。

来年の4月？

私から告白？

えっと…

来年の4月ってことは、完全に私と先生の関係が教師と生徒じゃなくなってるってことだよな？

私から告白ってことは、脈ありなんだよね？

頑張る。

頑張って、勉強する。

だって、あの学部は県内にあそこしかないんだもの。

後は県外になっちゃうなんて、付き合い直後遠恋なんて嫌過ぎる。

「は…はい！頑張ります。」

絶対、先生に告白してもらうの。頑張るから…見ててね。

「お待ちしてますからね。」

その笑顔は反則ですから…。

どうしよう…先生が素敵過ぎて、顔が赤くなってきちゃったよお。

「時枝先生」

先生の帰宅を高校の最寄り駅で待っていた。

「樹里さん？」

「約束、覚えていますか？」

4月になっても、私が先生を好きでいたら
先生に会いに来たら

告白してくれるんだよね？

「なんとなくか、高校を卒業すると女の子は垢抜けるのですね。驚
きました。」

それはそうだ。

今日はとっておきに可愛くしてきたつもりだ。

午前中に美容室に行ったり、ネイルケアにお店に行ったりもした。お化粧だって、毎日、毎日、練習してきたし、服だって店員さんにコーデしてもらったんだ。

「とても素敵なお嬢さんになってしまったので、気後れしてしまいますね。」

そんなこと言わないで…

今日のために精一杯のおしゃれをしてきたの。

「ここではなんなので…」

そう言った先生は私の手をとって、歩きだした。

うわぁ、この繋ぎ方、恋人繋ぎだよ。

顔が照れて赤くなってきた。

手が意外に大きいんだ。包まれちゃってる。

「樹里さん。」

「はい。」

連れてこられたのは、人気がない高校の正門前。

「貴女が卒業したので、やっと言えます。…夏井樹里さん。私とお付き合いしてくれますか？」

「はい。」

はい以外の返事なんて持ち合わせていない。半年以上待ったんだもの。即答以外の答え方も知らない。

「先生、好きなの。」

「私も樹里さんが、好きですよ。」

そい言つて、先生が私を掻き抱いた。

COOLな時枝先生じゃないみたいにな、情熱的な抱擁。

そして、耳元で、テノールの温かみがある声で囁かれた。

“ずっとこうしたい劣情を抱いていました。”

夏井樹里の場合（後書き）

劣情：動物的でいやらしい思い…

忍君たらムツツリいゝ（笑）

橘 先生の場合

絶句した。

時枝忍とは高校からの付き合いだから、早10年以上になる。

時間に正確な奴は堅物で、成績優秀な上、生徒会長もしていて、顔も冷たく整っていることから、周りからは、出身校の名前を取った“暁の冷帝”と呼ばれていた。

そんな彼が紹介してきた彼女は元生徒だと言う。

真面目を絵に描いたような男がまさかだ。

10歳下になる彼女に嬉しそうに微笑む姿は、その夜、俺に悪夢を見せて寝不足にしそうだ。

クラゲのような俺と歩く時計男の忍の接点は、同業者で同級生と言っただけであるが、何故か馬があった。

「かある聲、初めて彼女が出来たのだが、どこに連れて行ってやればいい？」

「ぐぶっ……………初めて？」

忍、俺達、もう30に近いんだぞ？

あまりな発言に口の中に残っていた分のビールを吹き出してしまった。

手元のおしぼりで拭きながら聞き返すと、至極真面目な顔をした忍がいた。

「いや、今まで女性とは一晩限りで過ごしてきたから、わからないんだ。相手はかなりの年下と言うことも含めると、未知の状態だね。」

そうですか。冷帝は女性にも冷帝だったと、本気の付き合いは初だ。

「そうだなあ…相手は大学生だろ？基本、食事行ったり、映画行ったり？…因みにどこまでの関係を持ってるんだ？」

「美味しく頂いた。」

「え？早くね？初デートもまだだよね？」

飄々と言い切った忍に俺は目を白黒させた。

「半年以上、ずっと見てるだけだったからな。告白したら箍が外れて、貪ってしまったから、次のデートに悩んでいるんだ。」

「じゃあ、家でのんびりまったりもいいんじゃない？」

「家に呼んだら、襲いそうだ。」

「君、本当にあの冷帝？時計男？Cold Stone？Cool Machine？」

無表情が売りの男が照れ笑いを浮かべている。
やっぱり悪夢を見そうだ。

「髻、すまない。そろそろ帰らないと9時には寝付けない。」

時計男は健在だったようだ。

半分ぐらいよりちよつと多めの金額を机に置いて、忍は帰った。

「あれで彼女とイチヤイチャすんのか…駄目だ。想像できねえ。」

店から出る後ろ姿を見ながら、ビールを飲んだ。

「あれ？橘先生？」
たちばな

道端で声をかけられて振り向けば、見覚えがあるようでない子。
教え子にこんな子いたっけ？

「？……」

「私です。去年、卒業した海山河里です。」
うみやまこうじ

本を読む物真似をした女に、ああと納得した。

「……うわぁ！あの？図書室の住人？」

「先生…人のことをどんな認識してたんですか？」

「いや、あまりに驚いた眼鏡はコンタクトにしても…少し痩せたのかな。とても綺麗になったね。」

そこに立っていたのは、俺の元教え子だった。
県内の大学2年になる教え子は、ボブに眼鏡、ポッチャリとしていて、常に図書室の住人として君臨していた。

「ありがとうございます。頑張つて、8キロ落としたんです。」

照れたように笑う姿が可愛らしい。なめらかに長い髪で、ショートパンツから出てる足が程々の肉付きで、女の子だなあとつい見つめてしまった。

「橘先生は相変わらずですね。」

「うーん。歴代の教え子の中で1番の変身率だなあと思ってさ。」

本当に可愛くなった。

「先生、1杯いかがですか？先週20歳になったんです。旧交を温めましょう。」

苦笑しながらも誘う元教え子に、誘われるまま俺は着いていった。

「先生…私、魅力ないんですかねえ。恋愛つて、本みたいにうまくいかない。」

この子は泣き上戸らしい。

シユンとして落ち込む。

んゝ、魅力ないって、かわいい方だと思うんだけどなあ。

目がうるうるしちゃって、無防備な姿は、つい、付け込みたくなる。

「どうして、魅力ないなんて思うの？」

頬に涙を伝わせ、じっと見られると、男心が疼く。

これで魅力がないなんて、ありえない。

現にキス一発でもかまして、泣き止ませたい。

「…大学入って、初めて男の人とお付き合いして…痛かったけど、えっちもしたんだけど、つまらないって…結局、二股かけられて、振られちゃって…」

ああ、ダメ男の典型に引ッ掛かったのか…

男だって初めての時は狼狽えただろうに、それを忘れて、女の子を大事にしてやる気持ちまで忘れるダメ男。

突ッ込んで、腰を動かすだけがセックスだと勘違いしている馬鹿野郎だ。

みいみい泣くのも可愛いが、教え子にはいつでも笑っていて欲しい。机越しから、隣に移動した。

「…おばかちゃんだねえ。そんな男に引ッ掛かっちゃうなんて…河里、男の先輩として言えば、セックスで女の子をちゃんと受け入れて貰える体にほぐさない男が悪いの。初めてが痛くて怖くて嫌になると、次の機会だって痛かったらなんて思うと受け入れたくないものね。」

頷いてる様子を見ながら、君は悪くないと遠回しに慰める。

「本当は大事に大事に身も心も花開かせるように愛撫して、初めて入れれると思うんだよね。女の子って肌を合わせて抱き合うだけでも満足感を得られるんだ。なら、優しく抱き締めることから始めて貰えたら嬉しいよね。」

泣き止んだようだ。

肩を抱いて、ゆっくりと頭を撫でてやる。

橘先生はアフターケアもしますよお。

「えっと…先生、その…」

「もしかして、その男、言っちゃいけない類の暴言も吐いたのかなあ？」

「私のがゆるゆるで気持ち良くないって…」

モジモジと恥じらい告白された。

ん…これはどう答えればいいかなあ。

膨圧かあ。てかバージンにそんなこと言っなんて、どんな馬鹿だよ。

そうだ…この前ナンパしたお姉さんが見てたサイトに色々書いてあった。

「河里、このサイトを読んでみるといいよ。お前より経験値が高いお姉様の知り合いが、男も色々調べるべきだって教えてくれたんだ。」

「男の人も勉強しなさいって。男女の性について、エロ本じゃあダメよってさ。月経や妊娠、射精や愛撫方法から始まり、男女が双方

向で互いを知り合わないかぎり、10代でのセックストラブルはな
くならないから、高校教諭してるなら、きちんと教え子に説明して、
悲しい思いを無くしてって言われてね。その人、高校時代に妊娠し
て、中絶。その時の事を後悔し続けてるんだって。」

横から覗きこんだ顔は段々とこちらを向いてきた。

真剣に俺が言ったことをきちんと飲み込んだようだ。

大変良い傾向です。

「…ありがとうございます。橘先生。先生を誘って良かった。目が
覚めました。」

うん。女の子は明るく可愛くだよね。

「じゃ「今日は人生の仕切り直しです。飲みましょう!」

あれ?おかしいなあ。

じゃあ、帰ろうかって提案しなきゃいけないところなのに
うん。憂さ晴らしかあ。

忍じやないけど、先生は寝たいよ。

「で、…何でこうなってるんだ?」

朝、右手の中にある柔らかくて一部固くて、つい揉みたくなる感触。
ふと顔を上げて確認してみれば、どう見ても夕べの教え子の河里だ
った。

昨晚を思い返してみる。

忍と吞んで、帰りに河里にあつてえゝ

また吞んでえゝ

帰りは……タクシーには乗った。

で……覚えてない。

部屋は自分の部屋だ。

「食っちゃった？」

ベッド周りに落ちている衣服と使用済みな夜の必需品の中身と袋。

「ん……も……むりいゝ」

いやゝ朝から下半身が生き帰るような可愛らしい声でまいっちゃうなあ。

今までちゃらい教師と言われたけど教え子だけは手を出してなかったのに。

いや、保護者とかはねえゝ……うん。

もう二度と関係持たないけどお。

「可愛い寝顔しちゃって……さて、支度しないと遅刻だ。」

柔らかい感触のものから手を離し、支度に入る。

まだまだぐっすりと眠っている彼女が気にならないでもないが、本日は金曜日。

仕事に行かなければならない。

ご飯とタオル、手紙を用意し、予備の鍵を置いておく。

「今日は職員会議だから……やば」

時間はギリギリ、河里を心配しながらも、俺は家を出た。

「たっだいまぁ」

誰もいなくとも挨拶はするのが日課だ。

今朝、置き去りにした元教え子は、鍵を掛けて去ったらしい。

「ケー番は教えだし、メアドも向こうは知ってるしいゝ…」

口に出して言葉にすることにより、頭の中を整理整頓する。

やはり多少混乱しているらしい。

学校を出る前に確かめた携帯を取出し見ると、メールの着信があった。

「んと…『昨日はありがとうございました。鍵は次の機会に』って次？次の機会？まだスクロール出来る。『っていうのは冗談です。』」

鍵は新聞受けの中に入れました。『……………あっホントだ。あるある。』

「

鍵を手に玄関から戻ると、新たにメールが来ていた。

「『女として自信が持てました。ありがと(^^) - chuu! !』…何ていうか…女の子だねえ。かわい……………ん？今、俺何て言うとした？」

今までの自分にはなかった《かわいい》に対しての感覚。
確かに女の子は皆かわいい。

むしろ女の子であるだけで皆かわいい。

でも…思い出すのは酒乱と痴態。

魅力がない。

そう言っただけで泣いた河里は可愛かった。

タクシーの中でどうしようとおろおろした姿は食べてしまいたくな
った。

いや、実際に食べた。

自分に自信がないとイヤイヤするのが可愛くて、ぺろりと…

「春が来たのは冷帝だけじゃないみたいだねえ。」

その気持ちは今までと違う。

何が違うかと言えば、重みが違う。

ストーンとしっくり心に填まる。

河里の顔が鮮明に思い出せる。

「本物見つけたかも。」

源氏物語に出てくる人物に準えられて、薫の君なんてあだ名をも
らった僕だ。

たらしなとこだけ似てるけど、明るく爽やかな僕としては、あの悶
々さだけは勘弁だね。

浮舟に対する執着だけは見習って河里を如何に口説くか、それだ
けを今日は考えて寝るとしようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9500m/>

LOVERS T&S

2011年2月20日12時17分発行